

フランス革命期の
キリスト教精神生
活の手引き ジャ

小泉友美 Koizumi
Tomomi

目次

はじめに	1
----------------	---

はじめに

ジャン ニコラ グルー神父は、1731 年北フランスで生まれ、18 世紀フランス大革命期を生きたイエズス会修道士であり、自分の所属していたイエズス会の弾圧や、オランダと英国に亡命する体験をしながらも、精神的導きに精力的活動して、魂の導きに精力的に携わった。代表作「Manuel des âmes intérieures 精神生活の手引き」(1863 年刊行)を通して、キリスト教精神的放棄と救いを紹介してゆきたい。(小泉友美翻訳)

18 世紀のカトリック キリスト教精神史に色濃い影響を与えていたのが、「Amour pur 純粋な愛」というコンセプトで、17 世紀より「Amour pur 純粋な愛」の教義につながる神秘的な熱狂が高まり、この「純粋な愛」、「無私の愛」とはカミに捧げられた瞑想生活のなかで、救いを求め私利私欲の見返りを期待しないこと。自分自分を完全に失って、カミの中に入って、カミのみに生きることによって、人は真の知恵を知ることが出来るのである。ジャン ニコラ グルーの霊性も、この自己意思を放棄して、ただひたすらにカミの意思に委ねることに影響されていることに注目したい。

「精神生活の手引き」のテキストを土台としながら、精神的放棄の道のボキャブラリーを抜粋して簡潔に紹介してゆきたい。

魂の死 mors animae, 放棄 desertio, 壊滅 exitium, 盲目 caecitas, 新生 nove nativitas, 純粋な愛 amor purus

魂の死 mors animae

新約聖書のマタイ 10・34 において、「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだと思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人はその父に、娘は母に、嫁は姑に、こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」

この剣とは、自分自身の墮落したすべての悪い性向を断ち切ってゆくことでもあって、過去や現在の執着の影響からようやく離れて、魂の死にいたる。魂の死とは、この世俗にまつわるすべての執着としがらみを断ち切って、自分の意思を捨ててカミに愛されていることを痛感することで、おそれはすでになく、決して動揺されずに、誘惑されることもなく、苦しみもない状態に入ることである。この魂の死の境地は、暴力の力とその原因を考えることで、信仰というものも常に安楽な状態に保たれているわけではなく、時に破壊の力が作用することがおおいにある。

放棄 desertio

新約聖書のルカ 23・46

「イエスは大声で叫ばれた。父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」

キリストはこの放棄感を天の父から見放された時に味わされた。この放棄は、まず使徒たちから見放されて、棄てられて、貧しくなって、まるで呪いの存在としてすべてを失って、心身に激しい痛み感じて、十字架にはりつけられながら、最後にこう叫んだのである。

「父よ、わたしの全霊をあなたの御手にお委ねいたします。」

放棄から放棄へ、試練から試練へ、どん底に落ちていって、放棄を知る。すべての外部からの影響の放棄とは、この現世への諦めであり、心の奥から嘆き、苦しみ続けて、すべての先入観を捨てて、軽蔑されることを恐れずに、嘲笑も気にせずに、迫害も恐れずに、恥の気持ちも捨てさって、キリスト教の信仰の道を歩んでゆくうえでのすべての悩みをも捨てさってゆき、この世間の善きにしろ悪きにしろの評価に耳を傾けることなく、おそれずに生きること。この放棄はまた、感覚の死でもあり、聴覚や視覚に心地よいことを避けて、官能性、悦楽、睡眠、華美な衣裳や食事を制限して、時には耐久生活をするることである。

自己意識の放棄とは、情よりも理性に従うことで、気まぐれにとまどわされずに、空想にも遊ばれずに、さまざまな感情にぶつかり合うことはない。一番大切なことは、カミが与えてくれるものにひたすら感謝して生きること。カミのご意思に従って、自分について関心を持ってもいけない。味覚がなくなってゆき、すべてが重荷で、すべてが厄介で、魂を疲れさせてしまう。そうして、カミの存在が少しずつ遠のいてゆき、本来であれば、カミとともにある魂は平和とともにあって、気づかないことは愚かであって、魂は追うように、ひたすらカミのみを愛してゆくのみ。

壊滅 exitium

旧約聖書の詩篇 38

「負わされた傷は膿んで悪臭を放ちます。わたしが愚かな行為をしたからです。」

わたしたちがおのれを見放すとき、それが壊滅であり、カミになにも頼むことができなくなってしまう。すべてのこころの動揺から遠のいて、すべての雑音、そして内から湧きあがってくるこころの反逆をなだめてゆく。このこころの反逆とは、こころの安定、休息を妨げる要因であること。自分自身を捨てさって、自身自身を殺して、少しずつゆったりとしてゆく。わたしたちはすべての感覚を放棄することで、安全な平和を探し求めることができ、地獄も、地上も、天国もないところにわたしたちの壊された魂を見つけられる。

盲目 caecitas

新約聖書 ヨハネの手紙 1,9・ 39

「わたしがこの世に來たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

わたしたちは生まれつきの原罪によって、盲目である、カミを識ることなく、わたしたち自身を知ることもない。わたしたちはこの先の運命をまったく見いだせずに、真の幸せも得ず、どのようないのちの道程きかもわからない。キリストはこの世の光であり、わたしたちの盲目性を癒やして下さる。

新生 nova nativitas

新約聖書 ローマの信徒への手紙 6・ 4

「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それはキリストが御父の栄光によって死者の中から復活されたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。もし、わたしたちがキリストと一体となってその死の姿にあやかるば、その復活の姿にもあやかるでしょう。わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。」

キリスト教徒は洗礼を通して生まれ変わり、キリストをとおして「新生」を得る。この「新生」においての犠牲とは、おのずの重かり軽けりの罪と不完全性を知って、この現世への諦め、心身の感覚の死、人格放棄、長所も短所もなすがまま、自身の放棄、精神的救済のあきらめをも受け入れて、ようやくすべての見せかけの価値から解き放されて、魂が極限の状態にまでさせる。

純粋な愛 amor purus

純粋な愛とは、自尊心のまったく混ざっていないカミからの恩恵の愛であり、自尊心(おのれを愛すること)とカミからの純粋な愛は、2つまったく異なる愛であり、この世俗のすべての執着を断ち切って精神的なものに属させてゆく。すべての執着を断ち切って、祈り(観想)と苦行(禁欲、試練)の生活に入らせてゆき、この純粋な愛は少しずつ抜け殻同然となってゆき、透明になる。魂は愛することも、愛されていることも感じなくなってゆき、純粋性への誘惑、信仰に反する誘惑、希望に反する誘惑、隣人の愛に対する誘惑、すべてから離れてゆき、「カミのみ Dieu seul」をたよる境地に辿り着くことができる。

おわりに

「精神生活の手引き」に解説される、ジャン ニコラ グルーの精神放棄の道は、魂の死 mors animae, 放棄 desertio, 壊滅 exitium, 盲目 caecitas, 新生 nova nativitas, 純粋な愛 amor purus のポキャブラリーによって表現され、すべての根底には純粋な愛の追求が

ある。

それは、すべての世俗への執着を断ち切ってゆき、キリストのために頼ること。特徴的なことは、すべての語の解説に聖書の引用がされており、すべての救いは「カミのみ Dieu seul」によって与えられることを強調していることである。

フランス大革命を通して苦難の道を歩んだジャン ニコラグルーの霊性の救いは、キリストの十字架を通しての「無私の愛」であった。

2025 年 4 月 7 日 フランス アンジェ 祈

フランス革命期のキリスト教精神生活の手引き ジャン ニコラ グルー Jean Nicolas Grou

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
